

# 目的持てば夢が具体化

## 企業と学生が ともに語った インターンシップ

学生記者  
大谷 秀之

### 早さと知恵求める企業

旭化成工業もアダプテックジャパンも、インターンシップで常時、学生を大勢受け入れている実績があり、企業側からのインターンシップの捉え方を聞くことができた。

セミナー第一部の基調講演は、「確信と自信」を持つ！「キャリアデザインに役立つインターンシップ」というテーマで始まった。

川氏は、何度も口にしてきた。キャリアデザインとは、「未来の自分」になるためのステップを描き、実行することだという。自分の未来像を頭の中で描き、そうなるためには何をすべきかを考え、実行する。そこで体験したことを踏まえて、新たな目標を設定する。この循環がキャリアデザインの一連の流れである。

現在の企業では、このようなキャリアデザインが要求されている。その

5月20日の土曜日に、就職部主催の「インターンシップ・ガイダンス」が8号館で開かれた。朝から雨が降り続いていたにもかかわらず、150名の学生が参加した。

学生にインターンシップを理解してもらおうことを目的として始まった催しで、今年はインターンシップを経験した学生の他に、旭化成工業の大池慎太郎氏とアダプテックジャパン（コンピュータの周辺機器を扱う外資系企業）の藤田航平氏、それと基調講演の講師として、リクルート「就職ジャーナル」編集長の石川純一氏が出席した。

まず、「働く」とはどんなことが、「就職」とは何かという問題提起から話が進んだ。

外資系の企業で働きたい。英語を話せるようになりたい、という夢を持つている学生はいる。しかし、大切なことは、「やりたいこと」の先にあるものだという。つまり、会社に入つてどのように働きたいか、会社で何ができるのか、英語を使って何をしたいのか、までの明確な目的を持つことで、これによって漠然とした夢を具体的にすることができると、講演のテーマの中にもある。また、講演のテーマの中にもある。キャリアデザインという言葉、石

川氏は話の中で、ある学生は松下電器でインターンシップをした後、自分には接客業が合っていると考え直して、スカイラクに入った。別の学生は、ソニーにインターンシップをしたことで、松下電器の風土の方が合っていると判断し、松下電器に就職を決めた。

インターンシップを経験すると、



一つのテーブルで語り合う企業側（左側3人）とインターンシップ経験の学生

それまで見えなかったものが見えてくるといふ。自分の力のなさや、大学生という気楽な立場にある自分に気が付いたり、授業の大切さがわかり、それまでとは授業態度がガラリと変わることもある。

石川氏の講演を聞いて、インターシップは、1つの枠でくくられるものではないことを実感した。それを使って、もの見方や考え方を变えていく機会になりうるし、自分を試す場にもなる。

講演の最後に、インターシップは、明確な目的を持って、自分に何が出来るのかを考えて、過度な期待を持たずにやるのが大切と語っていた。そして、自分のキャリアをデザインするのは「始まる」ではなく、間違いない「始める」ことだという言葉で締めくくった。

第2部はパネルディスカッションで、インターシップにおける、企業と学生の両方の意見を出し合うことになった。企業の側からは、旭化成の大池慎太郎氏と藤田航平氏がパ

ネラーとして紹介され、学生側からは4人のパネラーが参加した。自分の目指す職業が、自分に合っているかを試すために働いた山口裕美さん（商学部4年）。憧れの企業の内側を直接見たいと思った堀雄介君（法学部4年）。ハリのない学生生活にカンフル剤をと思い立ち、インター

## コミュニケーション能力を 目的思考を明確に持とう 情熱がすべてを変える

シップをした佐藤永一君（経済学部4年）。欧米の金融機関で働いてみたいと考え、7カ月間オランダの保険会社で働いた児島大明君（一橋大学商学部4年）。

学生が企業の中で、どこまで仕事ができるのかという話題では、どの企業も共通して求めるものは、早さと知恵だと藤田氏は語る。IT業界では、知恵の部分では、頭の柔らかい学生だからこそ生まれる発想もある。

逆に、企業の側から見ると、学生に足りないと感じる部分もある。第

1はコミュニケーション能力に欠けることだ。企業の中では、仲の良い仲間とだけでは仕事ができるわけではない。そのような場合に、「この仕事をお願いします」と積極的にいえない学生が多い。第2は、目的思考を明確に持つことができない。企業の中では、シエアをトップにする

のか、利益をいくら上げるのか、という目的を明確にした考え方が重要だという。第3は、情熱がすべてを変



会場につめかけた学生

えるという気持ちを持つ学生が少ない。さすがに中大OBだけあって、温い忠告である。

オランダでインターシップを経験した児島君は「欧米では学生が、インターシップをやることは、ほとんど当たり前になっている。また企業と大学との距離がとても近い。就職という面でも、インターシップを行い、そのまま就職ということもある」と話した。

日本の場合、就職とインターシップを切り離して考えている。実際、旭化成工業ではインターシップと就職活動の面接の基準は異なる。インターシップを行った学生が、その企業に入社することはあってもインターシップの延長線上で採用されるのではなく、あくまで一般学生と同じプロセスを経て、入社してくる。

◆ 今回のセミナーで強く感じたことは、インターシップの幅の広さである。そして、それぞれの目的に合ったインターシップを見つけて、自分を成長させていくことが大切なことだと感じた。